

## 27 江戸時代の電気療法——伊藤慎蔵譯本

『改正磁石靈震氣療説』について

渡部 幹 夫

順天堂大学医療看護学部

日本の電気についての記載は後藤梨春の紅毛談（一七六五）が始めてとされている。その後平賀源内は破損した摩擦起電機を手に入れ、紅毛談を参考に今に残るエレキテルを完成させた（一七七六）。一八三六年没の橋本宗吉（曇齋）は『エレキテル究理原』で電気を用いた医療について記している。石坂空洞の内服同功初編（一八五七）には越曆的兒法・附器械製造図解があり、二編（一八五九）には、瓦爾發尼斯繆私法（ガールハニスムム）として多くの図譜が掲載されており、機械は日本で作られているようにみられる。佐久間象山は電気治療器を製作し、実際に治療に用いたという（二八六〇）。江戸時代に我が国でも、電気ショックを与えることは医療に有効であると考えていたようであ

る。明治十四年出版佐藤英白訳『華氏電気療法』でも電気治療の効果の記述は原書の翻訳にとどまっていた。今回は伊藤慎蔵が一八六七年に譯出した『改正磁石靈震氣療説』と、江戸末期の電気療法に考察を加える。

伊藤慎蔵（一八二六—一八八〇）については古西義麿の評伝がある。長州の生まれで二七歳にて適塾の塾頭を勤め、一八五四年のロシア使節ブチャーチンの軍艦ディアナ号の大阪沖乗り入れ時には通訳に当たったという。越前大野の洋学館の蘭学教師として招かれ名声が高かったが、その後、名塩にて蘭学塾を開き、明治以降には兵庫県の神戸洋学伝習所教授職、その後文部大助教を勤めた。長濃丈夫は「不遇の蘭学者 伊藤慎蔵」としている。古西によれば大野時代に藩命にて航海術に関する『颶風新話』（原書は Henry Pidington: London 1852 蘭訳書から和訳）、『築城全書』（原書は G. A. van Kerkwijk: 1846 蘭書）を訳述している。その後『筆算提要』と『改正磁石靈震氣療法』を訳している。領域は気象航海術・土木工学・数学・電気医療と多彩である。

『改正磁石靈震氣療法』は千八百五十四年八月朔官許伊藤慎君独譯と記され、刊行は一八六七年である。本書中の凡例によれば磁石は「マグネート」靈震氣は「エレキテリシテイト」である。原典の手がかりは巻末に「ヒラデルヒア、アルチ、ストリート、百五十一番ニ於いて官医 デ、ヂ、ギリオン誌すとある。しかし原典を見つけない。挿図は二十図であり、原典からの翻刻と見られる。十五年後に発行された『華氏電氣療法』の図に比較すると著しく小さい。

明治三七年自ら『電氣療法』を著している富士川游も昭和十六年刊行『日本医学史』に、内服同功より「世未ダ試用多カラズ、人或ハ創見ヲ怪シムモノアラン、広ク高明ノ君子ニ試験ヲ冀ワントス」を引用し江戸末期の電氣療法の実際としている。

加藤木重教は大正七年の『日本電氣事業發達史』で医学上に於ける電氣応用の一斑として「総て医療器械は理屈一偏にては行かず、精神作用に及ぼす点の考慮を要し患者に快感を興ふる事に注意せざる可らず」と述べている。

江戸科学古典叢書の『エレキテル全書』（昭和五三年）で菊池俊彦は、日本の電氣理解を「正負の電氣現象がそっくり陰陽の理に転用されその正当性を裏付ける材料とされ、曇斎の後は簡単な検電器さえ入って来ないし、静電氣の数量的研究というような萌芽は見出せない。エレキテルが医療器として万能でないとわかれば多くの蘭学者の関心は離れていった。蘭学者の本業は医者であり、それに関係のないことを研究する余裕もない。化学・物理も医学という観点から捉えられたのである」としている。

基礎科学よりも科学技術のとりいれが急がれた江戸末期・明治において、伊藤譯本や佐藤譯本がアメリカで出版された原書からの翻訳であること、その後の日本が医学の導入をドイツから行ったことなどにより、日本の電氣による治療の歴史に断続性をもたらしたように思える。